

王運熙・楊明《隋唐五代文学批評史》第一編：《隋及び初唐の文学批評・緒論》訳注

甲斐，勝二
福岡大学人文学部

東，英寿
鹿児島大学法文学部

諸田，龍美
愛媛大学法文学部

<https://hdl.handle.net/2324/19712>

出版情報：福岡大学人文論叢. 32 (4), pp.2647-2665, 2001-03. 福岡大学総合研究所
バージョン：
権利関係：

王運熙・楊明《隋唐五代文学批評史》第一編

《隋及び初唐の文学批評・緒論》訳注

甲斐 勝二

東 英寿（鹿児島大学法文学部助教授）

諸田 龍美（愛媛大学法文学部講師）

翻訳にあたって

今回翻訳する《隋及び初唐の文学批評・緒論》は、復旦大学中国語言研究所王運熙・顧易生両教授の主編による《中国文学批評通史》中の一冊《隋唐五代文学批評史》最初の一編の緒論部分である。《中国文学批評通史》は、上海古籍出版社より一九八九年に出版が開始され、現在シリーズの全ての書籍の刊行が終了している。そのうち《隋唐五代文学批評史》は、王運熙・楊明両先生の手になるもので、一九九四年に出版、著者の王運熙先生はもとよりその高弟である陽明先生の二人は、復旦大学のみならず中国においても魏晉南北朝から唐代に至る文学及び文学批評史研究をリードしてきた碩学で、シリーズ刊行当初に出版された《魏晉南北朝文学批評史》もこの二人の手になったものである。

原書の内部構成は第一編が「隋及び初唐の文学批評」、第二編が「唐代中期の文学批評」、第三編が「晩唐五代の文学批評」となっている。それぞれに緒論があり、今回訳出した第一編の緒論部分は楊明氏の担当とのこと（原書説明による）。なお、今後第二編、第三編の緒論の訳注も継続して行う予定である。

第一編 隋及び初唐の文学評論

緒論

西暦 581 年北周の貴族楊堅が政権を奪い、隋朝を建国した。589 年、隋は南朝の陳を滅ぼす。三百余年に及ぶ南北分裂（その間西晋によるわずかな期間の統一はあったけれども）の状況はここにおいて終結し、中国は再び統一された。隋は命運つたなくすぐに滅んだものの、隋末に興った多数の武装勢力は新たに長期にわたる割拠をもたらすほどの力はない。中国の大地に次にうち立てられたのは、空前の強大さを持つ唐王朝であった。

隋及び唐初の統治者は新たな政治情勢に直面して、それぞれの分野から歴史的な教訓を総括し、いかにして我が政権を強固にするかを考えたが、その中には文化の面からの総括と考察も含まれていた。よって、文学と政治教化との関係、つまり文学が政治にどのような作用をもたらすかという問題が主題として繰り返し議論されることになる。魏晋南北朝の時期でも、人々はこのような問題を語っている。例えば、曹丕の《典論・論文》では「文章は、経国の大業」と言い、文章の政治に対する積極的な作用を認めている⁽¹⁾。この《論文》で示されているのは主に政治教化に密接な関係を持つ文章や著述である。つまり政治活動において不可欠な各種様式である詔・策・章・表・奏・議などの文章作品や、政治教化に役立つ参考となる材料を提供する子書や歴史的な著作を主に指す。政治教化とは関わりがなかった一般の抒情や叙景の作品などの場合、魏晋南北朝時代の人々はそれを心から喜び、それらの作品の美的喜びをもたらす作用を褒め称え、その創作と鑑賞に起こるさまざまな問題を検討して、そのような作品を作ったり楽しんだりすることに、精神的な満足を感じていた。彼らはこのような作品が政治教化といかなる関係があるかなどまじめに考えてこなかったし、また政治教化の効用を発揮してほしいとも考えていなかったが、このような作品の存在と発展が政治教化に有害なものであるとも考えていなかったのである（もちろん、これは一般的な傾向であって、少数の者、例えば齊梁期に生きた裴子野などは、別の考えを持っていた⁽²⁾）しかしながら、隋と初唐の論者となると違っている。彼らは文章と政治の関係を新たに考察し、とりわけ次のような問題を考え続けた。つまり、政治教化の意義は明らかではないが美的な意義を持つ作品や一般的な抒情や叙景の作品は封建的政治に対して、また政権の強化に対していかなる関係を持つのか、またそれらの作品に対していかなる態度を取るべきなのかという問題である。

当時の言論から見ると、隋と初唐の論者たちは主に次の三つの観点から文章と政治教化との関係を考えている。其の一は、最高統治者の文学愛好の問題。其の二は、文章によって人物（士）を選出するという問題。其の三は、文章を作る事と人物（士）の気風の問題である。この三種の問題は、共に歴史の発展過程の中で形作られてきたもので、現実と密接な関係を持つものでもあった。

其の一 最高統治者の文学愛好について。

文学の鑑賞と創作は、精神的な楽しみとして、一般的な知識人たちを引きつけたばかりでなく、統治者集団の上層の人物から王侯貴族までも引きつけた。魏晋南北朝は審美意識が高揚した時代である。その時代の始まりにあつては、魏の王室である曹操・曹丕・曹植が文学を愛し、詩賦に長じたばかりでなく、文士たちを招き寄せ、鑑賞と創作に従事させた⁽³⁾。南朝の歴代の君主と貴族にもまた、文学を好んだ者が多い。梁朝の蕭氏父子兄弟と陳朝の後主叔宝は、とりわけ文学に熱中のあまり、亡国の君主となってしまった。その後、隋の煬帝もまた陳叔宝の後を追うことになる。これが「亡国の君主というものは、多くが芸術的才能を持っている」（《陳書・帝紀総論》）という印象を鮮明に与えることになった。よって、単純に君主というものは文学を好んではならないという結論を出す者もでてくる。夙に陳の時代、何之元が撰した《梁典》では、「修辞性に富む文章制作は、天下の政治に関わりがなく、まともな人物の仕事ではないのだから、君主たる者がやるべきものであろうか」（《梁典総論》）と言っている⁽⁴⁾。隋代の李諤は、曹氏父子から批判を始めて、彼らが「君主たる者の大道をおろそかにし、修辞性に富む文章創作という小さな技芸を行った」（《上隋文帝書》）と責めている⁽⁵⁾。確かに、政治家たる者が、国を治めて人々の暮らしを整える事を個人の楽しみ追求よりも上に置くべきことは当然である。しかし、だからといって楽しみを持つべからずと言うことにはなるまい。陳の後主や隋の煬帝は、快樂な生活（文学や音楽などの楽しみも含まれる）に溺れ、国の政治を滅茶苦茶にしたが、曹父子の場合はそんな事にはなっていないからである。初唐の批評家の多くは李諤ほどには過激ではなかった。貞観年間（627-649）の君主や臣下は、文章の制作が政治教化に貢献するように願っていたし、同時に文学のもつ美と悦楽という作用も認めてもいたのである。統治者のこのような比較的懐の広い態度こそが、文学の発展に有利に働いたのだった⁽⁶⁾。

其の二 文章による人物の選抜について

文章によって人物を選出する事に関しては、更に知識人層全体に関係してくる。隋と初

唐の時期は、激しい社会の動乱や、農民一揆による徹底的な打ち壊しを経て、門閥士族の勢力が衰え始めた。さらに、統一された大帝国有用な人材を大量に吸収しようと努めた時に、それまでの九品中正制度はもはや人材選別の要求を満たすことはできなくなっていたため、一層広い範囲から、より多くの知識人を選抜して政権の各所に参加させねばならなかったのである。このような状況において、普遍的で、継続性のある試験制度が確立されてきた⁽⁷⁾。ここに所謂文章によって人物を選出するとは、受験生に論文を書かせること（「試策」）で、その政治・経済等の方面での考えを調べて評価しようとするものであり、また候補者の役人に訴訟の判決文（判詞）を書かせて、その判断の水準を調べるものである。既に文章制作の審査を行った上に更に考査が行われるのだから、文章の才能の高低という要素が合格のための重要な位置を必然的に占めることになった。しかも、唐の高宗永隆二年（681）より、試験の難度を増すために、進士の試策の前に、雑文（銘・箴・賦・詩等）の試験をしまさず予選を行ったので、文章の才能が持つ作用がより大きくなったのである⁽⁸⁾。文章力というものは突き詰めれば政治的な見解や能力とは違うものだ。よって、少なからぬ者がこの制度に疑いを持ち、この制度を批判した。高尚で徳のある人物や卓越した見識を持つ人材が実際にこの制度によって選ばれるものではないと考えたからである。このような批判は確かに合理性がある。梁代に文章で名を知られた沈約などは、かつて皇帝に、「たとえ秀才の資格者が五つの問に合格し、孝廉の資格者が一つの策にうまく答えられたとしても、これらは文章技能にすぎず、治世の功績・得失とは関わりのないものです。こんな力を基準にして人材を求めるのは、でたらめに過ぎません」（《通典・選挙四》）と奏上までしている。しかしながら、このような試験制度批判のおり、さらに歩を進めて文章まで排斥し、なかでも詩賦を排斥して、李諤の上奏と同様に、魏晋南北朝の文学の発展を全面的に否定してしまう者も現れたが、それでは乱暴すぎて状況が分かっていないと言わねばならない。

其三 文章創作と士人の気風の問題

文章創作と士人の気風に関しては、つとに隋唐の前に、文章の才能を人物の徳行と対立させて、文人は細かな規則を守らず勝手なことをして、軽薄に陥ると考える視点があった。隋と初唐の時期には、継続的で普遍的な文章で人物を採用する制度ができあがっていたから、批判的な態度を取る者は次のような批判をした。つまり、この制度によって知識人たちが文章創作に力を入れ、修辞の技芸にみんなが一斉に向かって行き、儒家經典の学問はおろそかになって衰退する、その結果彼らは文章に優れることで、自己満足に浸りまた軽

薄な態度で勝手な行為を行い、下らないことを競ってうつつを抜かしてしまうし、これはまた社会に文章を重んじて徳のある行いを軽んじる悪い気風をも作り上げるものだ、と責めたのである。このような意見を持つものは、しばしば一方的に文学を否定して、文学の発展を世の中が小賢しくなる源だと言うのである⁽⁹⁾。

これを要するに、隋と初唐の統治者は、文章と政治の関係について考察を進めたというものの、歴史教訓の総括と現実の問題の分析を機械的に単純化してしまい、文学を否定する偏狭な視点のいくつかを生み出してしまった。しかし、直接に政治教化を援助する文章や著述については、そのような論者はもとより排除してはいない。彼らが排斥したのは文学が美を表現する能力、審美性だったのである。つまり、文学が一般的に人の情感や物事の姿形をただ表現しているばかりで、直接的に政治教化に役立たないのであれば、有害だと見なしたのである。しかしながら、このような視点は人々が生活を送る実際の場では大きな影響を与えることはなかった⁽¹⁰⁾。文学の審美性というものは客観的に存在するものであり、それは人間が生きて行く上で必ず求められるものだからだ。隋と初唐の期間、文学の審美面に関する検討は依然として続いている。例えば、詩文の音律を整える声律、対句を練る対偶等の形式美に関する検討と総括、詩歌の情感と情景との関係に関する言論等々はそれぞれ重要な意味を持っている（原注 - 本編第三章第二節を見よ）⁽¹¹⁾。ある論者、例えば王勃などは、ある特定の状況の下では偏狭な言葉を発しているが、別の場所では文学の審美性について認めているのである⁽¹²⁾。隋と初唐の期間では、文学の美的な能力を否定する立場と肯定する立場の二種類が平行して存在しており、時には同一の論者でも二種類の立場が並存していた。けれども、この二種類の理論の間には理論上の論争はまだ展開されていなかったのである。

文学の美の発展にはそれ自身の法則がある。隋と初唐の文学の美的趣味の変化は、長い過程を経て来たものなのだ。貞観年間（627 - 649）の美的趣味は、基本的に南朝の趣味を踏襲していて、文章表現の美しさをとても重視している。これは創作ばかりでなく批評にもまた表れる。その表れの一つが、南朝の文学に対し概して肯定的な態度を取る点であり、歴代の著名な作家への評価も基本的には南朝の批評家と一致している点だ。そこで否定されるのは、梁の大同年間以後の蕭綱・蕭繹兄弟、及び徐陵・庾信だけである。しかも、その否定は概ね芸術表現上の趣味の違いを問題としたものではなく、彼らが「宮体」の作風を提唱して伝統的な道徳観念に背いたところにあったのである⁽¹³⁾。とはいえ、たとえ宮体詩の問題であったとしても、貞観年間の君臣たちの言行が決して一致していたわけではな

い。相変わらずその種の作品を作っていた者もいたのである。有名な例としては、唐の太宗が書いた後、虞世南に唱和させようとした話がある⁽¹⁴⁾。高宗時代になると、王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王の創作が濃厚な感情と壮大な氣勢によって、新しい風貌をこれまでより明快に表現している⁽¹⁵⁾。しかし、理論的な批評においては、彼らは南朝文学に対して真の総括を加えてはいない。王勃は南朝文学を否定する発言をしたことがあるが、しかしそれは李譔の上疏と同様、政教と文学の関係から出発して、文学の審美性を否定したもので、南朝の文学作品の美的な趣味を非難したものではない。彼と楊炯が提出した「剛健」・「骨氣」という主張は、大いに人の注意を引いたけれども、それは唐の龍朔年間（661-663）の「変体」の細か過ぎる繊細さに不満を持ったに過ぎず、自覚的に南朝に対して発言したのではないのだった。南朝では梁の劉勰や鍾嶸が既に「風骨」・「風力」を提唱しており、王勃・楊炯の主張はこれに比べて明らかな違いを持つものではなかったのである⁽¹⁶⁾。

初めに美学的な意味から南朝の詩を批判したのは、武后（684 - 704 在位）の時の陳子昂である。陳子昂は風骨を強調したばかりでなく、その上漢魏以前と晋宋以後の詩をはっきり二つに分けた。これは雄渾素朴の美への崇拜にも他ならない。この主張と劉勰・鍾嶸たちが風骨を提唱しつつ言葉の美しさをも重視する主張とは明らかな違いがある⁽¹⁷⁾。更に、陳子昂は風骨を主張すると同時に、興寄についても提唱していたのである⁽¹⁸⁾。興寄とは比興や象徴などの芸術的手法の事を言っているのではなく（当然ながら興寄を持つ作品にはそのような手法を用いても良い）、作品に深い人生の感慨がある事を求めるものである。風骨が外から見られる表現様式だとすると、興寄は内在する要素を示すことになる。興寄を持った作品は、情感を動かす一般的な力を持つばかりではなく、さらに作者が現実の人生の各種矛盾の中で巡らした深い思索や、大きな憂いや憤りなどを読者に感じさせるものなのだ。当然ながら、陳子昂はこれ程明快にはその主張を述べてはいないけれども、彼の詩歌創作を総合して考えれば、このように理解することは難くない。

美的な趣味の変化から述べるならば、陳子昂の詩歌に至ってようやく南朝とは大きく違ったものが表れる。それは創作の面だけでなく理論の面でもまた同様だ。陳子昂以前は質が変わるために量が変わる準備過程にあったのである。もちろん、陳子昂もまた孤立した存在ではない。陳子昂が生きた武後の時代とその些か後の中宗（705 - 710 在位）の時期は、実は初唐詩歌の創作と詩歌への批評の重要な時期である。当時の多くの詩人、例えば杜審言・崔融・李嶠・沈佺期・宋之問・劉希夷および喬知之・郭元振・王無競等の人物には、みな力強い風力を持った、重厚な氣勢の作品がある。全体的に言って、彼らの創作スタイ

ルは貞観の君臣たちとは既に明らかな違いがあるのである。詩歌批評に関して言えば、武后は郭元振の《宝剑篇》を激賞して、命令を下して数十冊を写させ諸学士に広く下賜しすらもしている（原注—この事は張説の《兵部尚書代國公贈少保郭公行状》に見える。）。これは注意すべき事件である。また、《大唐新語・文章》の記載によれば、張宣明が《孤松》の詩を賦したとき、鳳閣舍人の梁載言が褒めて「詩文に気力が充実するさまは、松そのものである」⁽¹⁹⁾と言っているし、張宣明が郭元振判官のために西域の三姓咽麵の地に使いしたとき、「昔聞く班家の子、筆硯忽然として投ず」などと詩を賦して、「当時の人から絶唱と讃えられた」と言う記事も載せられている。張宣明のこの二種の詩は、前者が武後の時で、後者が中宗の時の作品である（原注：梁載言は上元二年の進士で、鳳閣舍人となったのは、武後の時にあたる—武后は光宅元年（684）に中書省を鳳閣と改め、神龍（705-706）の初めに元に戻した—。また、郭元振が西域を鎮定していたのは中宗の時で、三姓咽麵は西域にある—咽麵州の都督府は羈糜州にあり、北庭都護府に属していた—。張説の《郭公行状》には郭元振が西域を鎮定したときの幕僚に「左拾遺張宣」の名を載せるが、これは張宣明を指すのではあるまいか）。郭元振の《宝剑篇》と張宣明の二詩は共に言葉は質朴で、気骨に溢れ、興寄に富んだ作品である。このような詩歌の批評が散見するという事実から、当時の人々の美的な趣味を知ることができる。よって、陳子昂が発した号令は、時代の気風が転換する時の必然であったと言ってよい。当然ながら、創作から見ても理論批評から見ても陳子昂が最も典型的で自覚的であった。

初唐詩歌批評の中でもう一つ注意しておかねばならないのは、詩格類の著作が少なからず表れていることである⁽²⁰⁾。例えば、上官儀の《筆札華梁》、元兢の《詩髓腦》、崔融の《唐朝新定詩格》等⁽²¹⁾がある。これらの著作の中には、各種の対句の格式をまとめたものや、声律面での問題を検討したものもある。そこでは、漢字の持つ四つの声調が平仄の二種に分類されてゆく二元化や、詩句の間で求められる黏対規則が確立し始めたこと、及び詩作の禁忌である「八病」が簡略化されてゆく傾向を見ることができる。南朝の齊代永明年間（483-493）以来、人々は詩文の声律規則への検討を二百年近くの長い間に涉って続け、律体詩はだんだんと定型化されてくる。初唐の詩格の中にこのような内容のものがあるのは、正しくその情況の反映なのである。中国の古典詩歌において重要な文学体裁の一つである律詩は、正しく武后や中宗のころの詩人、李嶠・杜審言・崔融・沈佺期・宋之問などの手によってその形を得たもので、高い価値を持つものだ。この時期には、一方では陳子昂が漢魏の風骨と興寄の古体詩を標榜しており、別の一方では律詩の近体詩の形式

ができあがっていて、この二者は背くことなく並び立ち、互いに影響を与えあっていると言することができる。陳子昂はもとより漢魏に倣った古体詩《感遇》などを代表作とするとはいえ、かなりの量の律詩を作ってもいて、後世には「その律詩は近体の祖である」とか、「律詩は極めて精密だ」（元人方回《瀛奎律髓》の評語）とか評する人物も出てくるのだ⁽²¹⁾。また、沈佺期や宋之問などの人物も、その主要な貢献は律詩体の完成にあったけれども、同時に多くの古体詩の作品がある。一般に認められるように、古体詩の場合はそこに風骨が有るように書くのは容易であるが、しかし風骨が絶対必要だというわけではない。風骨の有無は、やはり作者の審美観と作品の題材、情感の深さや大小等によって根本的には決まるものだからである。陳子昂の律詩は、さっぱりして高らかであり（疏朗俊邁）自ずとスマートなところがある。沈・宋等が作る律詩にもまた風骨の持つ明快さと深みがあり、力強いものがあるのだ。これは「風骨」の律詩における使用の反映だと言うべきであろう。これを要するに、武后と中宗の時代は唐詩の歴史において重要な時期であることは確かで、律詩の定型化、風骨及び興寄の重要視というものは皆この時期の重要な出来事である。初唐の詩格は、対句や声律の検討に関して、おろそかにできない価値を持っているのだ。

初唐には詩歌選集と詩歌の秀句を抜き出した書籍も登場している。元兢が編集したものに《古今詩人秀句》があり、その序文で、純粹に景色を描写した詩句は、情景から情感が導かれるものや胸の内を直截に述べた詩句と比べものにならないと認めている。従って「情緒を先にし、直接描写を基本とし、景色を写したものは後にし、美しいばかりのものは一番最後だ」という選録の原則を示したものとなっている⁽²²⁾。このような審美基準は詩の中での心情と景観の交錯融合といった重要な問題に関係してくる。同時にまた南朝の詩作のなかで、現象に似せることばかりを追求し、主体性と情感が乏しくなり淡泊になってしまった傾向への反動でもあった。詩歌に人を感動させる力があってほしいといった要求はその実、風力や風骨のかけ声と通じるものなのである。

隋と初唐の文学批評には、もう一つ、当時はあまり大きな影響を生み出さなかったとはいえ、後世の文体変革の濫觴となったものがある。それは南朝後期の実用文章の華やかさに対して統治者が不満を持ち、質素実直な風格でこの類の文章を書くことを要求したことだ。隋の文帝は、かつて行政手段によって華美な文章を禁止し、このために罪を得た者も出た⁽²³⁾。この禁止の手段はある程度の効果を与えている。例えば、《隋書・文学伝序》に讃えられる楊広の《与越公書》・《建東都詔》は、かなり質朴な風格であるが、これは先の禁止と関係があるはずだ⁽²⁴⁾。後に魏徵が南朝北朝の文章の良いところを兼ね備えよとい

う主張を提出し、北方の作品は「理がその言葉に勝り」、「実用性に優れる」と説いたが、これも主に実用性の文章を示して言ったものである⁽²⁶⁾。北朝の人物が書いたこの類の文章のスタイルは質素実直で、そこにこそ北朝の文章の優れた点があると魏徵は言いたかったのだ。魏徵本人のスタイルもかなり素朴実直なものである。このような主張は、当時においては実用性への考慮からでるもので、審美的な趣味からでてくるものではなかったし、一般の人々が持った文章の声律や色彩の美に対する高い評価を改めるものでもなかった。このような主張もまた駢儷文を散文に変えよと要求するわけではなく、要求したのは質実なスタイル、例えば出典のある言葉や華美な表現をあまり用いないようにするとか、対句や声律に振り回されないようにするなどである。けれども、それは正しく文章のスタイルが華麗なものから質朴なものへと向かう起点に他ならない。それは則ち駢儷文から散文へと変わって行く起点だと言って良い。なぜならば、唐代の散文（中唐の「古文」を代表とする）が駢儷文と区分される重要な要素の一つは、華麗な表現を用いず、素朴なスタイルを持つところにあるからだ。北朝の北周の蘇綽は既に文章のスタイルが華美であることに不満を持ち、改革を加えようとしていた。しかし、政治上の古に倣う改革に従ったため、盲目的に《尚書》を模倣して、矯正も度を過ぎてしまった。「実用性に優れる」どころではなく、華麗な駢儷文よりもひどくなったので、たちまち失敗してしまったのだ⁽²⁷⁾。隋と初唐に現れる文章のスタイルを質朴にせよという主張は、つまりは実用性と言う面から来るものである。後に盛唐を過ぎて中唐に至るや、文章の発展傾向はだんだんと文飾性のものから質実なものへと向かってゆく。よって、先の主張はその潮流に沿うたものであり、文飾性の高いものから質実なものへと向かってゆく流れの濫觴だと見なして良いだろう。

訳注

(1) 曹丕（187-226）父曹操の死後魏の皇帝となる。この「文章は、経国の大業」その後続く「不朽の盛事なり」の語と1セットになって、しばしば「文学の自覚」を示すものとして理解されている。原書が属すシリーズの中の一冊《魏晋南北朝文学批評史・第一編第二章曹魏文学批評》では、「それぞれの文章様式は封建国家の政治活動の中で重要な作用を持っていたので、曹丕は「経国の大業」と言ったのだ。例えば、詔・策・章・表・奏・議などは明らかに最も頻繁に使用される。盟・誓は外交の場に要請され、檄文は戦争の時に使用される。賦・頌は功德を褒め称えるときに用いられ、賦の場合は諷諫にも用い

られる。統治集団内で重要な人物が死んだときには、文人たちは競って誄を作った。連珠などの雑文ですら奏章の代わりとなったのである。郊祀・封禪等が重視されたのが大きな式典で、またそこには詩文が追加されなければならなかった。史書の編集は統治経験を総括し、同時に勸善懲悪が可能で、統治者の功業や徳行を後の世に伝えるものでもあるので、後漢の中央王朝が既に高い評価を与えている。後漢時代に大量に現れた子書は、その内容がしばしば政治教化と関係するものである。よって、両漢の統治者は文人の力を良く知っていたのだ。《人物志・流業》では各種の人材を論じて、文章著述の「文章の才」を一つの専門として列べている。曹氏父子が文人たちを広く集め優遇したのは、確かに彼らの文学を好む態度に出てくるのだが、彼らが文章の政治活動における力を十分に知っていた事と密接な関係がある。曹丕はこのような作用を総括して「経国の大業」と言ったのだ」と述べて、この「経国の大業」の語には一般的な叙事叙景を主とする小賦や詩歌を含むものだと理解していない。ただし、その次に続く「不朽の盛事」の語に対しては、心情や事柄を述べる小賦及び詩歌も含まれると考えている。参考までに記しておけば、岡村繁氏は嘗てこの部分に提示される「文章」が諸子的な一家言を指すものとして指摘しており（《曹丕の典論・論文について》支那学研究 24/25 合併号 S.35）、最近でも孫明君氏がこの語を原始儒教の三不朽説と両漢経学家の詩教観から封建国家の統治道具として政治の中に組み込むものだと考えている（《三曹与中国詩史・〈典論・論文〉甄微》清華大学出版社 1999）。

（2）裴子野（469-530）齊・梁の二朝に使えた。曾祖父に《三国志》に注をつけた裴松之、祖父に《史記集解》を撰した裴駰をもち、歴史家の家系として知られる。裴子野も《宋略》を始め多数の史書を撰す。蕭綱に『優れた歴史家の才能はあるが、文章の美しさはない』と評されたように、古典的な文体で質朴なスタイルであった。《魏晋南北朝文学批評史・第一編第二章南朝文学批評》では「屈原以下漢魏晋宋の辞賦作者に至るまでを裴子野は全て否定し、彼らは文章の人を動かす美しさばかりを知り、文章が政治教化のために働くという根本的な目的を忘れていたと考えた。裴子野の言い方によれば、文章の審美的悦楽の作用はまったく取るに足らないものであって、しかも情感を述べ情景を写して、自然の景物を描写する詩賦が流行する気風は政治教化に害を及ぼすことになる。……裴子野の言論は、主に宋の大明（457 - 464）以降から齊に至るまでの詩歌創作が流行して、儒学が相対的に零落した情況に対して発せられたものである。裴子野は主に芸術的な面から当時の作品を批判したのではなく、内容からまた文学の社会的効用の面から、それらの作

品を政治教化から逸脱するものだと批判し、情感や情景を描写する文学の発展に反対すらもしたのだ。」と述べている。

なお、訳者は裴子野のこのような批評は、裴子野が歴史記述者として王朝の衰亡という「歴史を描く」事実性の高さと実際の視点が求められる文章スタイルを持った事と、詩文家が専門とする文芸の文章スタイル（即ち言語表現による真実の描写という内容と共に、表現による悦楽という表現性や修辞性の高さを共に求められる文章スタイル）との、表現精神の対立として捉えることもできると思う。つまり、現象を言葉で忠実に把握しようとする立場と、言葉のもつ意味の広がりを感じの要素としてともに伝えようとする立場の違いである。よって、その理解の方法に大きな違いがあり、裴子野は後者の文章スタイルを現実から遠ざかるものとして嫌ったのだと見ることもできる。この現実と言葉の関係の問題は、文史哲が渾然一体とした中国の古典「文学」理論の中ではしばしば議論の対象となったが、文芸が歴史記述と共に統治階級の手にあった時代は、表現重視の姿勢が建前的に常に分が悪かったことは想像に難くない。

（3）曹操の文学愛好と文士の招集については、以下のような指摘も参考として考えておくべきだろう。岡村繁《建安文学への視角》：「曹操が近い将来に後漢王朝を乗っ取ろうと意図していたころ、その野望の実現を託すべき王子たちは、高度な貴族的教養を身につけさせるのに、ちょうど適当な年齢に達していた。建安十六年でかりに区切れれば曹丕は二十五才、曹植は二十才であった。このころから、曹操は急に王子たちの学問・文学の向上に積極的な支援をし始めている。という根拠としては、当時すでに名声の高かった学者ないしは文人が、相次いで曹丕や曹植の学問・文学のお相手をする官職に任命されている事が上げられる。……曹丕・曹植を中心とした建安文壇は、基本的には曹操の意図する方向に従って形成され、曹操の積極的な推進力によって発展充実したと考えて良い。」（《中国中世文学研究5》）。

（4）何之元（?-592）：梁の天監の末に使え、侯景の乱に始まる動乱の時代は武陵王に使え、武陵王の兵が敗れて後は王琳に使えた。王琳が陳に対抗して建てた梁の亡命政権が陳に滅ぼされて後、陳の叔陵に使えたが、叔陵が誅殺されて後は人事を絶ち、《梁典》を著した。齊の永元元年（499）より、王琳が捉えられるまでの75年間の事柄を記したもの。

（5）李譔（生卒年未詳）、初めは北齊に使えたが、後周、隋と使えた。この文は《隋書・李譔伝》に見える。これについて原書15頁には「彼は文章の制作には明確な政治的な目標がなければならず、そうでなければ作ってはならないと考えた。中でも君主たるも

のは一層修辭性の高い文章を好むべきではないというのだ」と述べている。なお、李諤が曹氏父子を責めた言葉は「魏の三祖、こども文詞を尚び、君人の大道を忽ろにして、雕虫の小技を好む」というもの（《隋書・卷六六・李諤伝》）。こうした李諤の主張は、《隋書》が、上書の直後に「皇帝は李諤の奏上した内容を天下に示し、（華美を尊ぶ）世の風潮は大いに革まった」と述べているように、隋文帝の「実」「朴」を重視せんとする施政方針に合致するものであった。その意味で、李諤個人の考えであると同時に、文帝の意に添うものでもあったろう。

（6）これについては原書第一編第三章初唐文学批評参照。そこでは魏徵や李百薬、姚思廉など太宗のもとに集まった人物が上げられて、「彼らの多くが直接政治に参与し、政策を決定する人物もいて、李世民（太宗）と関係が非常に密接であったし、また文才も持っていた。よって、彼らの文学に関する意見は、しばしば政治的な角度から考慮されたが、全体的に見れば、おおらかでもあり、文学自身の発展と特徴にも注意されている。李世民自身も一代の英主であり文芸を愛好した」と述べる。この点において、李世民は「詩書を悦ばなかった」隋文帝とは大いに異なっていたのである。《貞観政要・礼楽》には、御史大夫の杜淹が「前代の興亡は、実に楽に由る」と述べて、陳や齊の亡国の原因を「楽（歌を含む音楽）」に求めようとしたのに対し、太宗（李世民）が次のように反駁したことを載せている。「歎ぶ者これ（音声）を聞けば、則ち悦び、哀しむ者これを聴けば、則ち悲しむ。悲悦は人心に在り、楽によるに非ざるなり。將に亡びんとするの政には、其の人心苦しみ、然して苦心相感ず。故にこれを聞けば則ち悲しむのみ」。ここにより李世民は「文芸には王朝の興亡に関わるような影響力はない」と考えていたのではないかと推測される。これは、魏の嵇康の《声無哀楽論》に似て、文芸の社会的効力を限定的なものとして捉えようとするもので、却って「文学の独立性・独自性」を確保する効果を持ったと思われる。ただし、その場合の独立性、独自性がどのような位置づけを持ち、かつ人間の営みとして他の営みと如何様な関係を持ち、且つかような正当性の主張に裏付けられるのかについては、別に考える必要がある。

（7）この制度は一般に「科挙」として知られる。科挙には秀才・明経・進士・明法・明書・明算の六科があったが、初唐に秀才科が廃止されて以降、進士科が特に重視された。《科挙の話》（村上哲見、講談社現代新書 S.55）参照。

（8）これについて、原書第一編第三章初唐文学批評史 42 頁で次のように述べる。「貞観一八年の詔では受験生たちの答案が“理は論理に背き、辞は凡庸平俗だ”と責めている。

理とは内容を、辞とは文章表現を言うものだ。しかし、次第に受験生が増える上に、内容が深くまた時勢に適切なものも少なく、大多数が誰もが口にするような内容であった。よってしばしば文章表現によって順次をつけざるを得ない事になったのである。かくして文章によって士を取るというやり方は、政治的な実力をもつ人材の選抜にはほとんど役に立たず、受験生の作文力を調べるだけになる。このためにこの方法に対する種種の批判が生まれてきた。しかし、文章重視の風習は既にできあがっていたし、結局更に良い選抜方法も探し当てられなかったので、この制度に対する矛盾する姿勢や異なる意見はずっと続くことになる、唐初もまた同様であった。」

また、《科举制度与中国文化》（金淨 上海人民出版社 1990）では、「唐初の進士科の試験は“時務策”五条であった。時務策とは国家の現実の問題に関わるもので、読書人を古典籍の中からはい上げらせ、現実の社会に目を向け、問題を観察し考え、解決方法を図るものだ。漢代以来、人材の選抜にはこの策問方式が用いられ、かなり良い方法であった事は間違いない。しかし、長い間行われたので、題目も似たようなものとなり、しかも本心に厳しく複雑な社会の矛盾や問題は、それ自身封建社会の下での解決は不可能だ。受験生の絶対多数も国政にあずかった経験などはなく、しばしば問題に対して空虚で千篇一律の議論をなすことができるだけだった。……高宗調露二年（680）考功員外郎劉思立が「進士は只だ昔ながらの策文を唱えるばかりで、実際の能力がない」と責め、進士の試験に策文以外に、帖経若干条と雜文二種を加えることを奏上した。ここにいたって、進士科も雜文（詩・賦・銘・表等）・帖経（經典の文章を使った穴埋め問題）・策問の三回の試験制度になったのだ。……隋代及び唐代初めの秀才・進士の試策は、すでにかかなりの程度まで文学試験の状況となっていたが、唐の高宗の時に雜文二首が加えられてよりいっそう文学性が増した。玄宗の開元年間には雜文の二種が詩と賦の各一首にはっきり決められた。しかしながら三回の試験では、実は初めの詩賦が最も重要で、唐人の趙匡が開元年間に表した《選挙議》には“責任者の評価は、実は詩賦にあった”と言う。よって、唐人は進士科を“詞科”といい、後世でも唐の時代を“詩賦で士人を選んだ”と言っている」（58頁）と、唐代の試験制度の有様をのべている。

（9）原書第一編第三章初唐文学批評史 43頁には、王師旦が文辞に優れ太宗に好まれた張昌齡を試験に落第させた理由として、「彼は真に華麗な言葉遣いをしますが、その人となりは軽薄で文章は美しいが実がない、きっとまともな人物にはなりません。私はそれが怖い。後に続く者たちがまねをして、天下の氣風を変えてしまうのではないかと心配な

のです」という言葉を上げている。

(10) 原書第一編第三章初唐文学批評史 43 頁以降、王師旦が落第させた張昌齡の文章は王師旦に批判されたとはいえ、多くの人々からは喜ばれていたと述べ、当時科挙準備に作られた《兔園策》が審美的には南朝の美文を伝える徐庾体という美辞を散りばめるスタイルであったことから、審美的には多くの人間は徐庾体を好んでいたことを述べる。ここに言う徐庾体とは、梁代に流行した徐陵・庾信のスタイルを指す。また、当の為政者の一人であった隋煬帝自身が、自ら「宮体詩」を作製し、周囲に南朝からの文人を集めて一大サロンを形成し、梁・陳風の艶麗な詩作を楽しんだことなども、その顕著な一例であろう。

(11) 原書第一編第三章初唐文学批評第二節上官儀・元兢・崔融において、「まず始めに南朝永明から初唐の高宗、武後の世に至るまでの二百年間、詩の声律と禁忌の検討は非常に盛んだった」として、詩歌の規則が定型化し、平上去入の四声区分が平仄の二種区分に向かったこと、句と句の間の平仄の対を工夫する黏対の規則の確立、六朝齊梁時代に語られた八病説が簡略化されたことを主要な特徴として説明する。次に対について、初唐の論者は南朝の人々の観点を継承して「創作の実践の中から各種の対句形式をまとめ、ぴったりした対句を追求した」と述べ、これが律詩の定型化に沿ったものであったと言う。また元兢の《古今詩人秀句序》の示す「情緒を先にして」「景物描写を後にする」という抒情重視の主張を、叙景重視への批判とし、情景描写は情感の描写のために用いられるという視点がそこにあると指摘している。

(12) 王勃 (650-676) 政治教化の意味を持たない情感の描写や景物描写については軽視する傾向を持ち、南朝文学はもちろんのこと文学の歴史的発展への否定的発言もある。しかし、原書本編第 105 頁以降、実際には情感を述べ景物を描写する作品を排斥した訳ではないとして例を示し、結局「王勃は特定の場面では詩賦を軽視する発言をしたが、実際はそのような作品のもつ快い気持ちを導き、情感を導く審美的な能力についても理解していたのである」と述べている。

(13) 宮体：女性に関わるものや男女の情愛を描くスタイルの詩。梁の東宮から流行したのでその名がある。このような詩賦は従来なかったわけではないが、皇太子という特別な地位にあるものが、臣下と共に大量に作成し、流行を巻き起こすことはそれまでなかった。唐初の歴史家たちは齊梁を含む南朝文学を高く評価しているが、梁代後期と陳代の文学は非難する。彼らの批判の対象は、蕭綱・蕭繹・徐陵・庾信を代表とする梁代後期と陳代の文風であった。彼らが批判したのはおそらく形式的な面ではなく、その内容が女性描

写や男女の情愛に熱心であった事、つまり宮体詩とそれに類する駢儷文作品にあったようである。原書本編 56 頁以降参照。

(14) 宮体詩は初唐でも好まれていた形跡があり、《北齊書》を編集した李百葉は文苑伝の中では批判しながら、宮体詩をも残している。太宗の話は、《唐会要》巻六五に載る。原書本編 59 頁参照。参考のために挙げておけば、《新唐書・虞世南伝》においては、太宗が宮体詩を作製した際に、これを諷めた虞世南に対して、太宗は「朕は卿を試みしのみ（朕試卿耳）」と答えた、とされる。これは（例えば羅宗強《隋唐五代文学思想史》50 頁が指摘するように）太宗の自己正当化の弁とも受け取れようが、虞世南が、実は煬帝の文学サロンにおける有能な艶詩作家の一人であったことを考える併せると、ある種の真実味を帯びた言葉、すなわち、太宗が宮体詩を作製した背後には虞世南の「改心」のほどを瀕踏みせんとの意図があったことを表明した言葉、として解釈すべきかもしれない。《唐会要》の「朕更に此の詩（艶詩）有らば、卿能く死するや否や」という太宗の言葉にしても、同様の解釈が可能であろう。

(15) 王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王この四人は高宗・武后のころ「四傑」として名をさせた。政治的な野望をもちながら、志を得ず不平を抱いていたし、あちらこちらに行ったので、見聞も広がった。よって彼らの詩文の境地は開放的で、氣勢も壮大、文学史上では過去を受け未来につなぐ結節点の役割を演じる。原書 93 頁以降参照。

(16) 王勃前注 (12) 参照。王勃が反対したのは「上官体」と呼ばれる技巧的で艶麗な目にまばゆいスタイルに対してであった。楊炯 (650-693?) 《王勃集序》では、王勃がそれを批判して「骨気はことごとく失われ、剛健の響きもない」と述べたことを記している。とはいえ、彼らが修辭を否定していたわけではない。これは、南朝の劉勰や鍾嶸が示した「風骨」や「風力」と華麗さが併存させる審美的観点を継承していることを示す。原書本編 108 頁以降参照。なお、劉勰や鍾嶸が示した「風骨」や「風力」は、すっきりしていて剛健で人に感銘を与える力を持つスタイルを指すものという。詳しくは王運熙・楊明著《魏晉南北朝文学批評史・第二編南北朝文学批評・第三章劉勰《文心雕龍・論風骨》》446 頁参照。

(17) 陳子昂 (659-700) 四川地方の豪族の出身で、科挙を経て右拾遺の官に至るが、統治者に重視されたわけではない。二度従軍して張掖・幽州の地を経た。彼の詩文は生前から称賛を受け「吳から陳まで続いた六代の脆弱さを一掃する」と見なされた。斉梁期の劉勰・鍾嶸らが風骨・風力を提唱しつつ、晋宋の詩人へも高い評価していたことに對し、陳

子昂は漢魏の風骨が晋宋以後に伝わらなかったとして南朝の詩風に不満を示し、建安期の作者たちを崇拜して強調する。原書本編第三章第四節陳子昂、114頁参照

(18) 興寄：作品に現れる作者の深い感慨のこと。風骨が作品の全体的なスタイルに対して審美的な要求であるのに対して、興寄は内容に関する要求である。中国の伝統的観念では、詩の特徴は志を述べ感情を表現するところにあった。興寄はその志や情感を充実させ深いものにするのである。(原書116頁以降参照)。ちなみに、陳子昂は有名な著作《与東方左史虬修竹篇序》において、「興寄」について「私は暇な時に齊・梁時代の詩を読んだ事があるが、目がちかちかするほど美しいばかり、興寄たるものはまったく無くなってしまっていた。ため息をつくたびに、古人を思い起こせば、常に文風が衰え頹廢し、風雅の気風が廢れてしまった事を心配し、不安な気持ちになるのである」と述べている。また、「風骨」について、同作では「漢魏の風骨は、晋宋の間に伝わるのがなかった」という。原書116頁にもあるように、東方朔の《詠孤桐篇》(散逸)を称賛した「音声や情感に抑揚があり、文章は練り上げられて光彩を放ち、金石の響きがある(音情頓挫、光英朗練、有金石声)」という形容は、陳子昂が理想とした「漢魏の風骨」の具体的な説明ともなっている。

(19) 原文「文之氣質、不減長松也」：「氣質」は原書87頁に「(元兢《古今詩人秀句序》に言う)“助之質氣”の“質氣”とは“氣質”のこと。質実で剛健の意味、“風骨”“風力”に同じである」と述べている。

(20) 詩格：詩の格式や体例、またスタイル、またそのような問題を扱った書籍を指す。唐代の詩格類は日本人の留学僧空海が帰国して著した《文鏡秘府論》のなかに大量に引用されて残される。以下に引用される詩格類も同様。

(21) 上官儀(?-665) 貞観初めの進士。五言詩に優れ、高位に登った後はそのスタイルをまねするもの多く「上官体」と称された。崔融(653-706) 武則天に文才を愛されたが、則天の死後、哀策作成に苦慮し、発病して死んだという。その詩は律詩体に沿うものが多い。元兢(生没年不詳) 高宗龍朔年間(661-663)に周王(高祖第九子)の參軍になる。

(22) 方回《瀛奎律髓》：方回(1227-1307) 宋と元に使えた。宋が滅んでしばらくしてできた《瀛奎律髓》は唐宋の律詩を選評したもの。作品の題材によって49類に分類。「律とは何か、五七言の近体詩である。髓とは何か、皮や骨を示すのではないと言う意味だ」と言い「学者がこれを学べば、真髓を手に入れることができる」という。尚、本シリーズの《宋金元文学批評史・第四編第三章第二節方回》参照。

(23) 《古今詩人秀句》：十代に渉り、四百人近く、古詩から始めて上官儀までを集めたものという。漢から唐初までの詩歌の秀句を抄録したもの。現在は滅び《文鏡秘府論》のなかにその序文が残る。なお原書本編 83 頁以降参照。

(24) 《隋書・文学伝序》によると、文帝は統治に当たって質朴を旨とし、命令を出して虚飾を取り払わせたが、時流の文章はなお華美であったため、しばしば取り締まり局から弾劾書が出された事を記している。例えば、先述した李諤の《上隋文帝書》（《隋書・李諤伝》）には、文帝が「公私の文翰、並びに宜しく実録たるべし」と天下に布告した開皇四年（584）の九月に、泗州刺史の司馬幼之が「文表華墨黷」を理由に弾劾されたことがその上書に記されている。

(25) 楊広（569-618）：隋の煬帝のこと。原書 16 頁に、「《与越公書》等の煬帝の四編は、言葉遣いは質朴な方で、思想感情も典雅さがある……よって《隋書・文学伝序》では煬帝の行いは取るに足らずとはしていても、その文章は却って文章家の模範としている」と述べている。

(26) 魏徵（580-643）：初唐の名臣の一人で、《隋書》の序論の作者。引用は《隋書・文学伝序》のなかの言葉。原書 53 頁以降、「初唐の歴史家は南朝の文学成果が北朝に勝ることを認めつつ、北朝の文学にも肯定すべきところがあると指摘していた」として、この序文を「南北の長所を融合して新しい文章風格をうち立てようとした」ものと捉える。

(27) 蘇綽（498-546）：華美な文風の北朝への流入に反対し、祭廟のさい命を受けて《尚書》の用語を真似た《大誥》を書いた。その後実務的文章は皆このスタイルを真似たという。しかし、十五年も経たずに元に戻ってしまっている。これについて《周書・王褒庾信伝論》では「文章表現は古を師とする美しさがあったとはいえ、その矯正作用は時流に適したものではなかった。よって、恒常的なものとはなりえなかったのである」という。尚《魏晋南北朝批評史・第五章北朝文学批評》580 頁参照。

あとがき

訳者の三人のうち甲斐と東は、このシリーズの緒論部分が、各時代の批評史の概説として優れたものと考え、その訳注を一九九二年より始めた。現在先秦・魏晋・南北朝・及び北宋・南宋・金元そして近代の各緒論を訳出した。翻訳の方針は、まず極力読みやすいも

のにすること、また注釈は原書で該当箇所の詳細部分に従ってつける事を目指している。つまり、著者の視点に従った注釈を心がけた。しかしながら、評語の訳などは非常にやっかいで、不十分な所が残ることは否めない。誤解が起きそうな所は（ ）の中に原語を入れて付している。また、注には、幾箇所か訳者側からの視点や今後の研究のための留意点の如き事柄をつけ加えたところがある。中国の研究の視点と日本の研究の視点には社会や文化のあり方の違いから当然差異があり、その差異の存在を示すことによって、現象の解釈が少しでも立体的なものになる可能性があればと思うからだ。或る国に或る言語で伝えられる文学を他国の者が他国の言語で思考し研究する、そこに自己満足以外の意義が有るとすれば、このあたりにあるのだろうと思う。とはいえ、それを実行するとなると実力不足を痛感させられる。今回は、唐代文学の専門家である愛媛大学の諸田龍美氏の参加を得たが、それでも誤解による付け加えや言わずもがなと思われる注があることを危惧している。

なお、今回の訳注については、筆者である楊明教授より事前に貴重なご意見をいただき、こちらの誤解をいくつか直すことができた。末筆ながら感謝申し上げます。

訳文注釈含めてご叱正をお待ちします。

